

## 第3章 歴史

### 第1節 先史 大石遺跡と縄文農耕、古墳時代の横穴墓

#### 1 大石遺跡と縄文農耕

緒方盆地における文化的景観が形成される以前の歴史はどのようなものであったか。旧石器時代から古墳時代を通じて緒方盆地を取り巻く歴史的環境について概観してみたい。

まず、大石遺跡に触れる前に、さらに前史について簡単に述べておきたい。緒方盆地周辺に人々が住み始めたのは後期旧石器時代からである。平成元年（1989）から2年（1990）にかけて町営総合グラウンド建設にともなって調査された千人塚遺跡（標高220m）で、ナイフ形石器や三菱尖頭器、削器などが出土している。これらの石器群はAT（始良丹沢火山灰層）上位の石器群の組合せであり、2万数千年前と想定されよう。盆地周辺では表面採集された旧石器は見られるが、旧石器時代の遺跡は多くはない。同じように、縄文時代の遺跡も少ない。まとまったものとしては、縄文前期中葉に属する轟B式土器の新しい段階と野口・阿多タイプといわれる曾畑式土器への移行期の土器、瀬戸内地方の押引文土器などが千人塚遺跡から出土している。盆地内では緒方川の河岸段丘にあたる牛ノ田遺跡、寺縄手遺跡、大坪遺跡などで縄文後期から晩期終末の土器とともに扁平打製石斧などが散見される。盆地内でわずかながら縄文人の活動が見て取れる。

ところで、緒方盆地には直接接していないが、緒方盆地の南西部に位置する大石遺跡は原始的な農耕を示唆する代表的な遺跡である。祖母山北麓の標高350m前後の火山灰台地上に位置し、昭和33年（1958）から41年（1966）にかけて別府大学の賀川光夫を中心に5次にわたる発掘調査が実施された。調査の結果、住居跡を想定させる柱穴群、大型の竪穴遺構、夥しい数の土器や石器群が出土した。土器は表面が黒く磨かれた黒色磨研の浅鉢形土器、粗製の深鉢形土器に丹塗の鉢形土器が合わさり、晩期初頭の「大石式土器」が設定された。石器は、安山岩製で採集や耕作具の刃先と推定される扁平打製石斧、収穫具とされる石庖丁形石器などが多量に出土した。また、磨石や石皿に加え大陸では穀物粉碎具と考えられる磨棒、磨盤の出土が注目される。



写真1 大石遺跡全景（南から）

大石遺跡は半ば定住的な大遺跡で、縄文時代の伝統的な生業である狩猟・採集にかかわる遺物群に加え、刃部の磨滅した例を含む多量の扁平打製石斧、磨製や打製の石庖丁形石器、石鎌形石器、磨棒、磨盤などの出土から稲作開始以前に、火山灰台地での畑作物を中心とした原始的な農耕が行なわれていた可能性が高いといえる。似たような遺跡は大野川中上流域に集中する傾向にあり、縄文晩期には畑作農耕の広がりが見て取れる。

なお、大野川中上流域では弥生時代になっても遺跡の立地条件は変わらず、弥生後期まで畑作農耕が引き継がれることになる。

## 2 古墳時代の横穴墓

緒方盆地周辺では縄文時代と同様、弥生時代の遺跡も少ない。先にあげた千人塚遺跡で弥生中期後半の住居址群が5軒発見されているのが唯一の例であろう。そのほか、盆地内での生活の痕跡は明瞭でない。理由ははっきりしないが、大野川中上流域では弥生後期から終末期にかけて火山灰台地上に多くの大集落が展開するのと対照的である。大野川中上流域の遺跡群は多量の鉄器を保有し、約半数は鉄鍬で、そのほか手鎌（摘鎌）や鉄鎌、鋤先、鍬先などの収穫具や耕作具が一定程度含まれている。出土鉄器は狩猟と畑作が継続して行なわれていたことを想起させる。

緒方盆地周辺で迫田の開発が始まるのは古墳時代後期の6世紀代になってからである。古墳時代前・中期の様相は明確でない。一方、隣の三重盆地では6基の前方後円墳を含む古墳群が造営され、首長墓の系譜が見て取れる。緒方盆地に最も近い首長墓は、5世紀代に属する越生の漆生古墳群である。しかし、古墳群の立地からみて被葬者は緒方盆地を治めた首長ではなかろう。

6世紀代になると、緒方川に流れ込む中小河川の流域に横穴墓が造営されるようになる。大きく分けて、緒方盆地西側の川入川流域、盆地北側の上自在地区、盆地南側の清田川流域である。

以下、横穴墓の概要についてみておこう。川入川流域の井ノ前横穴墓は4基から5基で構成され、やや大型でドーム状の天井を持つ横穴墓が造営開始期のものである。あとは改葬骨か火葬骨を入れたと考えられる小型のものである。6世紀末から7世紀いっぱい使用されたものであろう。小宛横穴墓群は残りの良い5基から構成され、最も高い位置に造営された横穴墓が造営開始期のものである。玄室の縦横幅が2mを超え、奥には幅約70cm、高さ7~8cmの奥屍床（写真2）を造り付けている。他の3基も玄室の残りは良く、6世紀後半から末にかけて造営されたものとみられる。簡略化されたものは7世紀半ばまで下るものであろう。

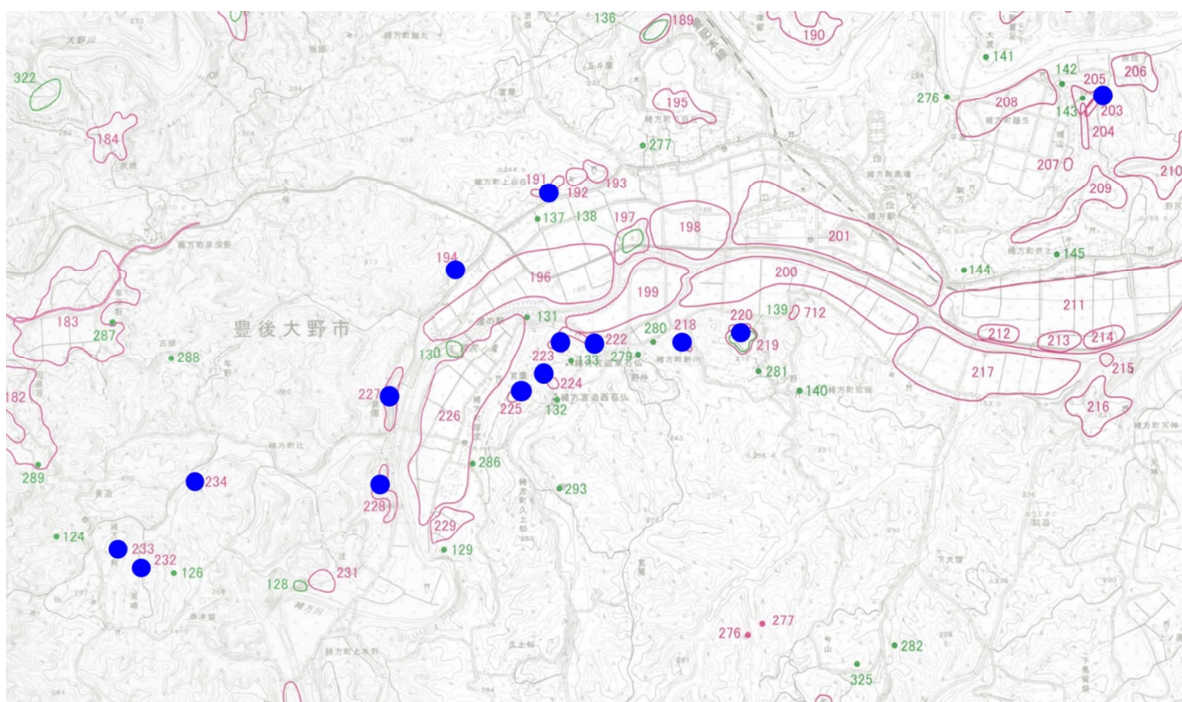


図1 緒方盆地周辺の横穴墓分布図（「大分県遺跡地図」に加筆）

上自在地区に分布する横穴墓群は規模が小さく、時期的にも新しいものが多いようである。清田川流域では、野仲横穴墓群が3基で構成されている。中心の横穴墓は6世紀後半代とみられ、飾縁が良く残り、向かって左側に宝塔のレリーフが追刻されている。宮迫東石仏の隣に位置する大日上横穴墓群は大型の横穴墓5基が整然と並んで造営されている。さらにもう1基は石仏側に

位置し、現状で6基確認できる。飾縁もしっかり残り、玄室は方形でドーム型の天井を有している。6世紀後半代を中心としたもので、連続して造営されたことが窺える。清田川流域の有力集団の墓地であろう。また、近くの宮園横穴墓群は20基近くが確認でき、緒方盆地を取り巻く横穴墓群では最も基数が多い。少なくとも4群に分かれて造営されている。それぞれのグループには古い形式が含まれ造営



写真2 小宛横穴墓群の中央に位置する横穴墓の奥屍床

開始期を示しているものであろう。中には屋根の鴨居を掘り込んだ横穴墓も確認できる。6世紀後半代から7世紀いっぱいまで下るものも存在する。時代は異なるが、宮迫東石仏や宮迫西石仏群周辺に有力な横穴墓が多い。

緒方盆地周辺のすべての横穴墓には触れられなかったが、横穴墓は緒方川に流れ込む中小河川流域の阿蘇溶結凝灰岩を穿って数基単位で造営されている特徴がある。造墓主体は、当時の迫田の開発を担った集団と集落に関係しているとみられ、特に清田川流域の開発面積が広く、有力集団の形成につながった可能性がある。横穴墓の副葬品は明らかでないものの、江戸時代には六箱横穴墓が偶然発見され、鉄刀や轡、鉄鏃などが出土し、副葬品の一端が明らかになった。

なお、古墳時代までの開発は中小河川流域までで終始し、緒方盆地の平野部までには及ばなかった。緒方盆地の文化的景観の形成は、平野部に井路を整備し、開発が大きく進展した次の時代を待たなければならなかった。

#### 【参考文献】

緒方町教育委員会『千人塚遺跡』1999

緒方町歴史民俗資料館『緒方町誌・総論編』2001

" >α( , æ Ž \ )t %o² 5 b6ä\$î

>/ , æb3¶C)t %o\ U3o™î \ μ - ™î

%& %\$



































